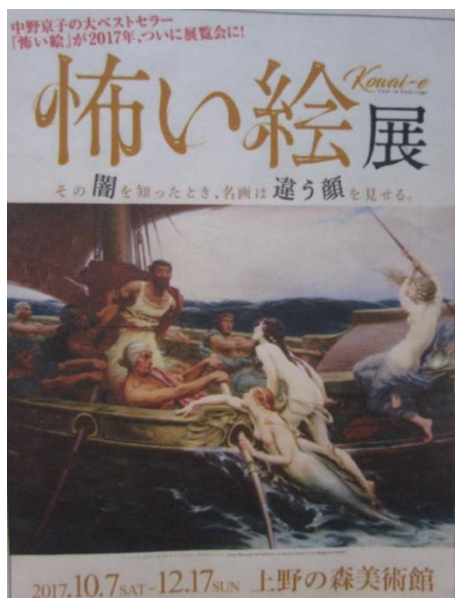


「怖い絵展」 その闇を知ったとき、名画は違う顔を見せる

兵庫県立美術館 2017. 07. 22～09. 18 上野の森美術館(東京) 2017. 10. 07～12. 17



ハーバート・ジェイムス・ドレイバー

《オデュッセイとセイレーン》1909年

本展は「恐怖」をテーマに絵画に隠された物語を読み解く企画で、「ターナー、モロー、セザンヌ」らのゾクゾクする怖いとされる絵画作品「約80点」が集結している。

特別監修は、ドイツ文学者「怖い絵」の著作を数多く出版している「中野京子」氏で、書籍に登場する作品だけではなく新たに追加して構成されている。本展の特徴は、視覚的に直接「怖さ」が伝わるものから、歴史的シチュエーションを知ることにより、はじめて「怖さ」を感じるものまで、普段美術に求める「美」にも匹敵する「恐怖」の魅力をあますことなく紹介するものである。

ドラローシュの傑作 《レディ・ジェーン・グレイの処刑》 1833年



注目展示品は、本邦初公開されるロンドン・ナショナル・ギャラリーが誇る作品である。

「ジョン・グレイ」は、イングランド最初の女王であるが、玉座に座ったのはわずか9日間で、追われて半年後には花盛りの16歳時に処刑されてしまう。

画面の左側に巨大な円柱があり、宮殿の間とおぼしき場所で処刑が行なわれようとしている場面で、その円柱にすがりつき、背中を見せて泣く侍女と失神しかける侍女で、後者の膝に

置かれたマントと宝石類は、直前まで身に着けていたもので、極めて演出的な計算されつくした場面を描いた作品である。